



## ＊ 研究会報告 ＊

漢陽大学校東アジア文化研究所主催国際学術会議

# 「グローバル時代と東アジアの文化表象Ⅰ」の報告

内田 青蔵（非文字資料研究センター 研究員）

## はじめに

2013年2月1日から2日までの2日間、韓国ソウル市の漢陽大学校東アジア文化研究所主催による「グローバル時代と東アジアの文化表象Ⅰ」をテーマとした国際学術会議が開かれた。開催の2日間は、あいにくの雨模様であったが、パネラーの発表は注目すべきものが多く、熱い議論が展開された。本学の非文字資料研究センター（以下、本学センターと記す）と漢陽大学校東アジア文化研究所とは学術交流の提携を結んでおり、そのため筆者と金容範氏の2名が本学センターを代表して参加し、発表を行った。本稿は、この国際学術会議の概要報告である。

さて、この国際学術会議の発表者とそのテーマは、以下の通りであった。

### ①金容範（神奈川大学 非文字資料研究センター）

韓国近・現代の住居文化の表象としての文化住宅  
—‘生活の近代化’から‘農村の近代化’に至るまで—  
討論：冨井正憲（漢陽大学校 建築学部）

### ②内田青蔵（神奈川大学 建築学科／非文字資料研究センター）

“洋風”から“和洋併存”あるいは“和洋混交”へ  
—明治初期の和洋館並列型住宅様式の成立過程にみる  
国家的住宅様式の誕生に関する一考察—  
討論：韓東洙（漢陽大学校 建築学部）

### ③李京僖（漢陽大学校 東アジア文化研究所）

揺れ動く＜日本的＞な富士山  
討論：李漢正（祥明大学校 日本語文学科）

### ④丁秀珍（東国大学校 教養教育院）

無形文化財から無形文化遺産へ—グローバル時代の文化表象  
討論：ナムクンウ（東国大学校 教養教育院）

### ⑤朴美貞（国際日本文化研究センター）

絵葉書というテキストと植民地朝鮮  
討論：河世鳳（韓国海洋大学校 東アジア学科）

### ⑥睦秀炫（ソウル大学校 奎章閣韓国学研究院）

韓半島地形の視覚的表象—主体の眼と他者の眼  
討論：權幸佳（韓国芸術総合学校）

### ⑦菅浩二（國學院大學 研究開発推進センター）

日韓同祖論と神社  
討論：朴奎泰（漢陽大学校 日本語・文化学部）

### ⑧裴寛紋（韓国外国語大学校 日語日文学科）

＜神国日本＞のイメージ変遷  
討論：南相旭（成均館大学校 比較文化研究所）

すなわち、発表者は8名で、その内訳は、日本在住の研究者が4名、韓国在住の研究者が4名であった。会議は、発表者が発表を終えた後に、それぞれの討論者が具体的な質問を投げかけ、議論を開始し、会場からも質問を受けるという形式で行われた。また、会場では、同時通訳も行われた。なお、当日は、各発表の内容の原稿をまとめた配布物も用意されたが、論文はそれぞれの言語によるものであった。

## 非文字研究関連の発表について

本学非文字資料研究センターからは筆者と金氏の2名が参加し、初日に発表を行った。金氏は、主題は「韓国近・現代の住居文化の表象としての文化住宅」、副題は「‘生活の近代化’から‘農村の近代化’に至るまで」とし、発表を行った。金氏は、現在、本学センターの研究員として所属しているが、会場校である漢陽大学校建築学部の卒業生で、韓国の近代住宅史研究で学位を取得されている若手研究者である。さて、その報告内容は、韓国の近現代住居文化を考えるうえで注目される3つの時代の建築を取り上げ、その時代と建築のあり様が当時の政策

と極めて深く関わったものであることを論じたものである。その3つの時代とは、1920年代以降に日本の影響を受けて出現した「文化住宅」、戦後の都市化の中で誕生した1960年代のアパート、そして、1970代に展開された農村の近代化の中で生まれたセマウル住宅である。これらは、今日の韓国の住まいや住文化に大きく影響を与えてきたものであり、こうした建築や生活スタイルが実はその時代の政策と直結した中で大きく変わってきたものであることを示し、それ故、今後の住まいのあり様を見定めるにはこれらの再考が必要であることを論じた意欲的な発表であった。とりわけ、分析にあたっては、当時の韓国で発行された新聞・雑誌などのマスメディアに登場した写真や広告・風刺画などの非文字資料を駆使し、非文字研究としても魅力的なものであった。

一方、筆者は、主題を「“洋風”から“和洋併存”あるいは“和洋混交”へ」とし「明治初期の和洋館並列型住宅様式の成立過程にみる国家的住宅様式の誕生に関する一考察」という副題を添えて発表した。具体的には、明治以降の上流層の新しい住宅形式を取り上げ、国家的住宅様式の成立の過程として論じたものである。その主張するところは、上流層の住宅形式は明治当初の1860-70年代は「洋風」がめざされたが、1880年代（明治10年代後半）にはオーストリアやロシアの王室存続の手法を参考にしながら国会維持のための政策的変更により伝統性を重視した「和洋併存」「和洋混交」といったものへと変化したこと、ただ、その変更は伝統を尊重し継承しようとする内在的伝統継承の動きではなく、あくまでも「伝統回帰」という動きと解すべきものであったことを論じた。

本学センターから参加の2名は、ともに専門領域を建築史研究とするものであり、それ故建築を主題とする発表であったが、他の6名の発表は極めて多岐にわたる内容のものであり、各発表の資料も非文字資料を扱ったものが多く、興味深かった。そのうち、非文字研究という観点から見て特に興味深かったのが、国際日本文化研究センターの朴美貞氏による「絵葉書というテキストと植民地朝鮮」という発表であった。絵葉書は、本学センターでも非文字研究の基礎資料のひとつとして収集しているものでもあり、資料の扱い方や分析方法など大いに参考となるものであった。すなわち、朴氏は、これまで日本の植民地施政における「植民地イメージ」の解析として、戦前期に実施された「官展」に出品された日本人画家による「朝鮮の視覚表象」について通時的・共時的解析を

試み、その結果、その絵画の主題から、朝鮮表象の時代区分として「1910-21年：武断統治期」、「1922-36年：文化政治期」「1937-44年：戦争総動員期」の3つの時代区分ができること、具体的には「朝鮮の風俗全体を対象とした時代」、「独立運動で主導的な旧両班階層と労働に従事する既婚女性に関心を持った時代」そして「労働する男性への関心が増大した時代」といえることを明らかにしている。この時代区分をもとに、絵葉書の内容を整理・分類できる可能性を示唆し、今後の研究の可能性を示した。発表後は、絵葉書の解釈の問題や、他の植民地における研究の可能性についての質疑も活発に行われるなど、絵葉書を資料とする研究の可能性が感じられる発表であった。また、李京僖氏の「揺れ動く＜日本的＞な富士山」、睦秀炫氏の「韓半島地形の視覚的表象—主体の眼と他者の眼」、裴寛紋氏の「＜神国日本＞のイメージ変遷」も、映画フィルムから地図、絵巻物、紙幣などの多様で豊富な非文字資料を用いた研究であり、非文字資料を中心とした研究の大いなる発展性やその可能性を感じることができる発表が多かった。

## 結びにかえて

今回の国際学術会議は、発表者は8名と多くはなかったものの、各発表者には討論者がおり、発表後に内容を掘り下げた討論が行われるなど極めて刺激的なものであった。加えて、発表者の多くが非文字資料を駆使した研究を発表され、非文字研究の新たな可能性を感じることができた。今後もこうしたお互いが刺激し合うことのできる学術交流が行われることを大いに期待したい。なお、本会の国際学術会議は、韓国と日本の研究者によるものであったが本年6月に韓国と中国の研究者による同様の国際学術会議が計画されているという。同時通訳の問題もあって、3国による学術会議は難しいかもしれないが、次回は、3国による学術交流を期待したいと思う。

